

既存コレステロール薬

抗がん剤副作用抑制か

松山大研究 手足しびれ予防

松山大薬学部の武智研志准教授(42)らの研究グループは3日、コレステロール治療薬として広く使用されているスタチン系薬剤で、抗がん剤治療に伴う手足のしびれなどを予防できる可能性があると明らかにした。既存薬の新たな効果として認められれば副作用の軽減につながり、患者の生活の向上や治療継続率の改善が期待される。

大腸がんなどに用いられる抗がん剤オキサリプラチンは、副作用としてしびれや痛覚過敏といった末梢(まっしょう)神経障害が高頻度でみられ、患者の身体的苦痛が大きいことが課題だった。武智准教授らは、血液中のコレステロール値を下げるスタチン系薬剤が持つ抗炎症作用や神経保護作用といった多面的な効果に着目。副作用抑制への活

用を模索した。

全国13施設の協力を得て、2009年4月〜19年

12月末にオキサリプラチンが投与された患者2657人のカルテ情報を収集、解



スタチン系の薬剤で抗がん剤による末梢神経障害の発生を約3割抑制する効果を確認した武智研志准教授

＝3日午前、松山市道後樋又

析した。大腸がん患者でスタチンを併用した人は、していない人に比べ3割ほど末梢神経障害の発現率が低いことが分かった。

松山市道後樋又の松山大樋又キャンパスで会見した武智准教授は「スタチンの多面的効果のうち、保護効果の部分が働き、末梢神経障害を抑制した可能性がある」と説明した。

スタチンのような既存薬品に新たな薬効を見いだす「ドラッグ・リポジショニング」は開発コストや期間を大幅に短縮できるメリットがあるとし「今後は有効性と安全性を検証し、アカデミアの立場から患者さんを幸せにできる薬を見つけ、現場に届けたい」と意気込んだ。

研究の論文は9月下旬、米国臨床薬理学会の公式雑誌「Clinical and Translational Science」に掲載された。(増田有梨)